

平成30年度劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)

成果報告書

団 体 名	京都造形芸術大学舞台芸術研究センター	
施 設 名	京都芸術劇場	
助成対象活動名	公演事業・人材養成事業	
内定額(総額)	17,425	(千円)
公演事業	14,174	(千円)
人材養成事業	3,251	(千円)
普及啓発事業		(千円)

(2) 平成30年度実施事業一覧

【公演事業】					
番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	クロード・レジ演出『夢と錯乱』	2018年5月5日、6日	『夢と錯乱』 演出：クロード・レジ 作：ゲオルク・トラークル 出演：ヤン・ブドー	目標値	280
		京都芸術劇場 春秋座		実績値	274
2	オックスフォード大学演劇協会(OUDS)来日公演『十二夜』	2018年8月11日	『十二夜』 作：ウィリアム・シェイクスピア 出演・演出・舞台スタッフ：OUDS学生	目標値	450
		京都芸術劇場 春秋座		実績値	341
3	ウースター・グループ『タウンホール事件』	2018年10月12～14日	『タウンホール事件』 演出：エリザベス・ルコンプト 主な出演者：モーラ・ティアニー、ケイト・ヴァルク	目標値	450
		京都芸術劇場 春秋座		実績値	543
4	『破壊の子ら』	2018年11月30日～12月2日	『破壊の子ら』 演出：筒井潤 出演：倉田翠、野田まどか、福岡まな実、松尾恵美	目標値	220
		京都芸術劇場 春秋座		実績値	196
5	春秋座—能と狂言	2019年1月27日	番組：トーク、狂言『二人袴』、能『自然居士』 主な出演者：観世鏡之丞、野村万作、野村萬斎	目標値	650
		京都芸術劇場 春秋座		実績値	615
6	「琉球舞踊と組踊 春秋座特別公演」	2019年2月23日	女踊「四つ竹」、二才踊「前の浜」、女踊「天川」、古典音楽独唱、雑踊「鳩間節」、組踊「孝行の巻」作：玉城朝薫 主な出演者：宮城能鳳、西江喜春、比嘉聡	目標値	500
		京都芸術劇場 春秋座		実績値	668
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
平成30年度の目標値、実績値				目標値	2,550
				実績値	2,637

(2) 平成30年度実施事業一覧

【人材養成事業】					
番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	演じるシニア2018	2018年8月25日・26日	「レジェンド・オブ・L I V E Ⅱ」構成・演出・美術：杉原邦生、出演者：60歳以上の一般公募参加者、京都造形芸術大学学生	目標値	700
		京都芸術劇場春秋座		実績値	931
2	不思議の国のアリス	2018年9月1日・2日	「不思議の国のアリス」構成・振付・美術：森山開次、会場装飾WS：森山開次、京都造形芸術大学学生	目標値	400
		京都芸術劇場春秋座		実績値	376
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
平成30年度の目標値、実績値				目標値	1,100
				実績値	1,307

【妥当性】

自己評価

社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。

■本劇場の社会的役割は「大学の劇場」という点が大きな特色だが、平成30年度はそのミッションに基づいて、下記の組み立てを行い、おおむね所期の成果を得た。

① 《世界》を《京都》へ：「京都・関西圏」という歴史ある地域社会に国内外の先端的な舞台芸術作品を幅広く紹介。＜公演事業番号1、2、3、6＞

② 《京都》から《世界》へ：「伝統芸能」から「現代芸術」まで、地域が育んだ豊かな芸術文化の土壌を基盤とする新たな作品を創造・発信。＜公演事業番号4＞

③ 学術的・実践的ネットワークの形成・更新。＜14機関との協力体制を築いた他、人材養成事業では、アーティストと地域住民、本学学生の協働による作品創作を実施＞

■京都・関西圏が、豊かな伝統文化及び小劇場演劇・ダンス文化を育ててきた地域であることをふまえ、上記の他にも、伝統芸能に関わる多彩な講義・プログラム、小劇場を拠点に活動するアーティストによる研究会・ワークショップも開催した。京都国際舞台芸術祭では、地域の関連団体と協働関係を築いている。

助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

■**文化的な役割**＝本劇場では、地域および世界の第一線で活躍するアーティストが、伝統から先端的表现まで幅広いジャンル・規模において、ハイレベルの作品を提供している。

■**社会的な役割**＝本劇場の友の会会員制度では近畿圏以外からの会員も2割おり、地域のみならず全国からも注目を集めている。毎年高い動員率を達成しており、平成30年度のアンケート回収率は過去2年間を上回った。

また、本劇場は「大学の劇場」としての教育機能も担っており、本劇場のフロント・ステージスタッフには本学学生が参加している。その他、地域のアーティスト、技術スタッフ、研究者も多く関わっており、教育の場、作品創作・発表の場となっている。

■**経済的な役割**＝本劇場は京都市中心部からやや離れており、観客の多くが近隣の飲食店等を利用したものと推測される。

【有効性】

自己評価

目標を達成したか。

■公演事業については、当劇場の掲げる4つの運営理念—①伝統演劇・舞踊を〈再発見〉するプログラム、②現代演劇・舞踊の〈歴史性〉を検証するプログラム、③〈未来の舞台芸術〉を発見するプログラム、④優れた国外作品・アーティストを「京都」に紹介するためのプログラム—のもと、6件の事業をより広い層の観客に届けるべく、バランスのよいプログラムを実施し、ほぼ所期の目標を達成できた。例えば、①として上演した「春秋座—能と狂言」では、能楽界の第一線で活躍する演者による質の高い舞台を提供するとともに、実演家と研究者によるトーク、当日パンフレットに詞章とその現代語訳を掲載するなど、古典のより深い理解に向けて様々なアプローチを行った。また、④として上演した『夢と錯乱』は、1923年生まれで独自の理念で正統かつ過激な演出を続けてきたクロード・レジの最後の演出の仕事となった。レジのドキュメンタリー映画の上映も関連事業として開催し、多角的な視点でアーティストとしてのレジの紹介を行った。

また、モニター制度や、参加アーティスト・スタッフへのアンケートも実施した。モニター制度は当該公演に関わっていない舞台芸術関係の専門家に依頼し、公演および関連企画を対象とし、公演としての評価や意義あるいは課題について提言をいただいた。いずれも第三者の専門家による貴重な意見であり、今後の企画に生かしていく予定である。

■人材養成事業については、アーティスト、学生と一般市民が協働する企画を実施した。参加者へのアンケートから、これまで以上に舞台芸術への関心が高くなっていることが明確になった。また、アーティスト、学生、参加者とのコミュニティが企画終了後も続いており、令和元年度以降も引き続き地域の方と学生が劇場をプラットフォームにしたコミュニティを継続できる仕組みを構築し、舞台芸術に関わる人材養成に取り組む予定である。

【効率性】

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。
アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

■事業期間については、公演事業・人材養成事業とも、年度を通してスケジュールの偏りもなく、すべて当初の計画通りの日程・公演回数で実施することができた。なお、公演回数については、劇場の客席を通常どおり使用する公演は、基本的に1ステージで実施し、特設客席を要する演出の公演では、複数ステージ（2～4公演）で実施した。

■事業費においては、公演事業・人材養成事業とも、当初の計画から大幅な変更はなく、予算内に収めることができた。

事業費が計画通りに、適切な予算内で進められたことは、共催・協力などの関係団体の協力を得られたことによるところが大きい。共同招聘事業のクロード・レジ演出『夢と錯乱』、ウースターグループ『タウンホール事件』では、広報や旅行手配など制作面で、静岡県舞台芸術センターや神奈川芸術劇場との協力体制が築けたため、渡航費などの経費を押さえることができた。『タウンホール事件』（京都国際舞台芸術祭実行委員会との共催）、「琉球舞踊と組踊」（国立劇場おきなわとの共催）でも、経費負担を軽減することができた。また、それぞれのネットワークを生かした関連企画（京都国際舞台芸術祭での会場であるロームシアターでのアーティストトーク、組踊演者によるワークショップなど）を実施することもできたし、『破壊の子ら』では近在の京都芸術センターの制作支援事業により稽古場を無償で提供され、京都芸術センターでの関連ワークショップの開催や、広報の面においても協力を得ることができた。

以上のように、適切な事業期間、事業費のもと、計画通りの成果を上げることができた。なお、出演者・スタッフにおいても、公演事業・人材養成事業とも、当初の予定通り、関連企画を含め、ベストメンバーでの体制で実施することができた。

【創造性】

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

■以下の視点において、地域の芸術文化をリードする優れた事業を開催できた。

（１）「大学の劇場」としての特色、及びそれに基づく成果

【妥当性】の項に記した本劇場のミッションのもと、本劇場は、芸術系大学である本学教員（＝アーティスト、批評家・研究者）及び外部有識者で構成される運営会議によって、企画・運営がなされている。その結果、創造現場と研究・教育現場を結ぶ多様なネットワークが構築されている。平成30年度も、こうした資源を活用することで、本報告書【有効性】にあげた4つの柱をバランスよく実施し、本劇場のミッションを達成することができた。また、春秋座芸術監督は、歌舞伎俳優の四代目市川猿之助であり、その人気により、友の会会員数は、平成25年度の就任以来増加し、劇場事業全体の安定的な集客につながっている。

（２）劇場施設の特色、及びそれに基づく成果

本劇場は、本格的な歌舞伎上演に必要なほぼすべての機構を備え、そうした施設を「伝統」から「現代」まで幅広いジャンルに応用できる高度な柔軟性を発揮してきた。また技術監督の大田和司（劇団維新派出身）は、数多くの実験的な現代演劇・ダンス作品を手掛けてきた実績ある舞台監督である。平成30年度も、こうした特色を活かし、他の劇場ではできない実験的な試みを実施することができた。たとえば、「春秋座 能と狂言」では花道を橋掛かりとして使用し、ダンス公演『破壊の子ら』では、劇場空間全体を活用した特殊な舞台上舞台・客席を実現することで、劇場空間の芸術的可能性を拡張することができた。

（３）公演事業の芸術性・創造性

平成30年度も、国内外の優れた作品の招聘公演を実施した。伝統芸能公演（「春秋座 能と狂言」、「琉球舞踊と組踊」）には、人間国宝（狂言・野村万作氏、能・大倉源次郎氏、組踊・宮城能鳳氏、西江喜春氏、比嘉聰氏）をはじめとする国内トップレベルのアーティストが出演している。劇場空間の活用による独創的成果は、上記（２）で述べた通りの成果をあげた。また、海外招聘公演では、20世紀後半から今日にかけて、世界演劇史を文字通り牽引してきた、フランス現代演劇の巨匠であるクロード・レジ、及びウースターグループの近作を、個々のアーティストの芸術的要求をほぼ完全に満たす形で紹介することができた。

（４）人材養成事業の創造性

地域のシニア世代と本学学生が参加する創作公演『演じるシニア2018』は、現代演劇からスーパー歌舞伎まで手掛ける新進気鋭の演出家・杉原邦生（本学卒業生）がファシリテーターを務め、優れた芸術的体験を参加者にもたらすことができた。

【創造性】

自己評価

地域の実演芸術の振興など、地域の文化芸術の発展につながっていた（と認められる）か。

■以下の視点において、地域の文化芸術の発展につなげることができた。

（１）地域とのネットワークによる成果

本劇場（＝舞台芸術研究センター）は、平成22年から開催されている京都国際舞台芸術祭に初年度から協力体制を築いており、平成25年度より実行委員長は当センター主任研究員の森山直人が務めている。その京都国際舞台芸術祭との協力のもと、平成30年度は、アメリカ前衛演劇を代表するウースターグループによる、高度な劇場機構に基づくハイテクノロジーを用いた本格的な日本公演を本劇場で実現することができた。

（２）プレス掲載と多様な情報発信

事業の取り組みは新聞記事等メディアに多く取り上げられ、平成30年度の掲載本数は前年比123%増であった。また、本劇場では、劇場ニュースレターの発行、ウェブサイト、SNSでの事業情報発信の他、舞台芸術の新たな可能性を考察する書籍として機関誌『舞台芸術』を毎年発行している。

（３）多様な自己評価軸

観客・アーティストへのアンケート、モニター制度による外部評価からは、当劇場への満足度、劇場方針への評価を知ることができた。改善すべき課題はあるものの、事業としては概ね高い評価を得ることができた。

【持続性】

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した（と認められる）か。

■平成30年度は、以下のように、事業を通じて本劇場の活動が持続的に発展したと認められる。

（１）事業運営の安定化

本劇場は、京都造形芸術大学（学校法人瓜生山学園）が所有する劇場である。本学は志願者数も毎年定員を上回り、安定した経営基盤を維持している。

また、本研究センターが母体となって設立された「共同利用・共同研究拠点」は、文部科学省から令和6年度までの認定を受けており、それに基づく私学事業団の経常経費特別補助金が、安定収入として見込まれている（こうした収入は、将来の公演事業に向けた研究・実験のための研究活動にあてられている）。

また、センター主任研究員が立ち上げた研究プロジェクトは、文部科学省「科学研究費・基盤研究（A）」の研究補助の対象となっている。

（２）劇場全体の質的向上

劇場スタッフを国内外の舞台芸術祭や劇場の現地調査に派遣。研究センター内では、その調査報告会による情報共有と同時に、アンケート等で指摘される日常的な劇場運営の課題を発見するミーティングを定期開催することにより、独自のPDCAサイクルを構築している。外部識者を招聘した勉強会も実施し劇場の質的向上に努めている。

（３）ネットワークの構築

京都国際舞台芸術祭実行委員会メンバーである本劇場から、毎年2名のスタッフが公式プログラムの制作として携わり、実行委員メンバーである地域の劇場（ロームシアター京都、京都芸術センター）のスタッフとの継続的な協力体制を築いている。また、劇場開設以来培ってきた他劇場とのネットワークを生かし、協力公演も積極的に実施している。

（４）中長期的目標

完成された舞台芸術作品を上演・発信する「ファクトリー機能」と、作品の創作に必要な調査・研究を行う「ラボラトリー機能」を軸に、複数年度にまたがる事業が進行中である。また、令和3年の「劇場20周年」、令和9年の「大学設立50周年」に向けた企画会議も進行している。